

平成31年4月号～令和2年3月号掲載分

# 「平成」から 「令和」へ

日常生活に活気と安らぎ、  
希望に満ちた新時代

## この時期の復興に向けた主な動き

- H31. 4月 浪江町立小・中学校 合同休校式を実施
- R元. 7月 「イオン浪江店」がオープン
- 7月 標葉郷野馬追祭
- 8月～11月 浪江町イメージアップキャラクター「うけどん」がゆるキャラ®グランプリ初挑戦（全国35位・県内1位）
- 9月 県道35号（いわき浪江線）の特別通過交通開始
- 10月 うけどんデザイン「ご当地ナンバー」の交付開始
- 10月 浪江町水産業共同利用施設が完成（請戸漁港）
- 10月～11月 県内外で浪江町町政懇談会を実施
- 11月 復興なみえ町十日市祭・大堀相馬焼「大せとまつり」
- 11月 “浪江町から元気を届けるご当地アイドル”「浪江女子発組合」の結成が発表（復興なみえ町十日市祭）
- 11月 「浪江町立学校校舎等検討委員会」が町に答申
- R2. 3月 福島水素エネルギー研究フィールド開所
- 3月 JR常磐線浪江駅～富岡駅間の運転が再開し、全線が開通



復興が進む請戸漁港「出初式」（1月）



町のさらなるにぎわいを祝して  
「イオン浪江店」オープン（7月）



うけどんデザイン  
「ご当地ナンバー」  
（10月）



JR常磐線全線開通（3月）



群馬県

## 岩田 康太郎さん(南津島)

取材者：特定非営利活動法人高崎子ども劇場 大澤・関根

取材日：平成30年12月17日 [平成31年4月 広報なみえ掲載]

### 春になったらまた福島へ！



▲毎年つけている「農家日記」

平成27年3月に群馬に来てから、持病の腰痛が悪化したため一度も福島に帰ることができなかった岩田さん。平成30年11月に初めて福島に帰ることができました。1週間ほどの滞在でしたが南津島の家への立入り、本宮の仮設住宅でお世話になった方々へお礼の挨拶ができたほか、岳温泉にも親戚や友人と行ってきました。

春になったら、再び福島へ行く計画を立てていますが、浪江にも一泊したいと今から楽しみにしていらっやいます。

◆避難生活での人との出会い  
震災後、二本松市の針道小学校に1か月、磐梯山の麓にある七ツ森のペンションに3か月くらい避難し、8月の終わりに本宮の仮設住宅に入居しました。  
七ツ森のペンションでは、同室になった河合さんが私のことを知っているよと言ってくれたこともあって、よく一緒に山菜採りに行きました。  
また、本宮の仮設住宅では、たまたま近くの農家の増子さんと知り合い、米の収穫から脱穀まで手伝ったり、30坪くらいの畑も貸していただき、好きな畑仕事を続けることができました。  
平成27年3月中旬に本宮から群馬へ移りましたが、腰痛の悪化から入院することになってしまいました。仮設住宅には家財道具を残してありましたが、

七ツ森で同室だった河合さんが私の代わりに仮設住宅返却手続、残した荷物の群馬への運搬までしてくれ、家にも泊まっていてくれました。

◆畑仕事のできる今の暮らし  
群馬に来てからは、近くに2人の妹が住んでいて時々様子を見にきてくれるので心強く思っています。  
今は農作物を育てるのが何よりの楽しみで、作物ができたときの喜びはかけがえのないものとなっています。農閑期の手入れや土作りも忙しく、「ああしようこうしよう」と一年中興味は尽きません。浪江でも竹やぶの中でシイタケ栽培をやっていましたが、群馬に来た年に菌を仕込んだシイタケが今年(平成30年)の春に初めて収穫できるようにになりました。

◆これからのこと  
近くのホームセンターで知り合って、食事を一緒にしたり収穫を手伝ったりと群馬で初めてできた友人が、11月21日に亡くなってしまいました。  
とても残念で、悲しい。でも、その人の紹介があって稲わらなどはその知り合いの方から譲ってもらうことができるようになったので、これからも大切にしたいたいと思っています。  
今は、高崎の病院に月1回通院しています。畑仕事で少々頑張ると腰の痛みがひどくなるのでほどほどにしようと思っていますが、これからもまだまだ畑は楽しみたい。今日は近くのホームセンターで新しい年の「農家日記」も買ってきました。

消波ブロックからイシモチを釣ったことや十日市のにぎわい、雪の降った日に南津島の家で子供たちとスキーをしたことなど、浪江での思い出はたくさんあります。群馬に住むことに決めたけど、浪江での生活や農業体験が今につながっています。

▼昨年の春から収穫できるようになったシイタケ



▲岩田さんの野菜畑。ホウレンソウ、白菜、春菊、カブ作りも順調に進んでいる様子でした



京都府

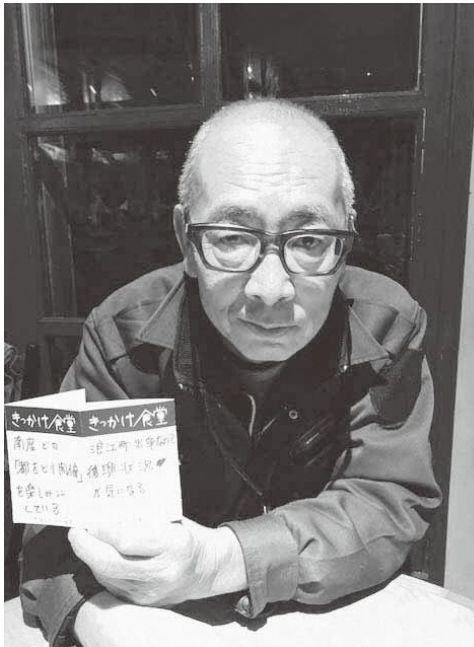
## 岡部 正則さん(権現堂出身・京都府在住)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永

取材日：1月11日 [平成31年4月 広報なみえ掲載]

### 我が友、我が先輩 震災からの8年間、 本当にお疲れさまでした

岡部さんは高校卒業まで浪江町にお住まいで、現在は京都で関西福島県人会やNPO法人ナルク京都ことの会会員の皆さんと共に、故郷のために人や物をつないだり写真展を開催したりするなど精力的に活動中。浪江中学校の同級生だった馬場有氏（前浪江町長）、双葉高校の先輩だった高木成幸氏（元学者・フリーカメラマン）への感謝の思いも込めたお話をお聞かせいただきました。



▲東北や震災について考えるきっかけを作ろうと、毎月11日に開催されている「きっかけ食堂」にて

阪神淡路大震災発災後は、自分なりにできることでお手伝いをやっていたんだけど、東日本の災害直後は、正直言えば「自分にも何かできる」なんて思わなかったんだよ。ニュースの映像や新聞報道で、それくらい衝撃を受けていたから…。だけど、4月にテレビでもつちゃん（馬場有氏）が「浪江町民を助けてほしい」と訴えているのを見たら、じっとしていらなくなっちゃった。それでまず8月に、高校時代の仲間の安否確認のために同級会を開催したら45人も参加があって、みんなが無事を喜び合い、同時に故郷

応援の思いを強くしたの。それからはストーブや毛布、蕎麦などの物資を届けたり、傾聴活動や福島県出身の舞妓さんを連れて慰問に行ったりしてるよ。けれど、年月が経つにつれ周りの人たちの震災への関心が薄れていくのを感じ、原発事故による風評被害やいじめなどの問題に心が痛んでね。それで、高校の高木先輩がフリーカメラマンとして故郷の風景を残す活動をされていることにヒントを得て「故郷を想う自分たちが発信するしかない」と、年に一度、写真展を開催することに決めたんだ。厳しい現実と一歩ず

つ前進している様子とどちらも知ってほしいと考えているから、偏りのない撮影と展示を意識している。「たもっちゃん、高木先輩。ありがとう。お疲れさまでした。」という気持ちでこれからも続けていくよ。

浪江の思い出といえば、東北一だった鮭の築場。イクラを取った後の鮭をもらって、おいしく食べたなあ。十日市祭りは、木下サーカスも来たんだよ。どんなに離れていても、生まれ育った故郷の思い出は消えないね。浪江町に戻られた皆さんはいかがお過ごしだろう。懐かしい昔話もできるコミュニケーションの場として、復興公営住宅等に4、5人でゆっくり入れるお風呂があったらいいんじゃないかな。



北海道



## 久保 利江さん(川添出身・北海道在住)

取材者：一般社団法人北海道広域避難アシスト協会 佐藤

取材日：1月17日 「平成31年4月 広報なみえ掲載」

### 函館で、故郷「福島」を守り続ける

北海道函館市の五稜郭公園近くで郷土風味『魚来亭』を営む久保さん。結婚を機に浪江町を離れ東京で暮らした後、夫の出身である函館でお店をオープンし、今年で42年目を迎えます。福島にゆかりのあるお客様のご利用も多く、函館福島県人会の集まりなど、人の交わる場所として、地域に根差した故郷「福島」を守り続けています。



▲左から 長女の長田加奈江さん、久保さん、長男の英隆さん

それ梅が届き、その梅で梅酒を作ってお店で提供したり、11月になれば新米が届き、新年になればお餅や干し柿がたくさん届くのが本当にうれしいです。干し柿は本当に楽しみです、主人の大好物でしたか

結婚して浪江町から東京に移り住み、「函館に来たのは昭和52年のことでした。主人は運輸会社に勤めていたのですが、主人の出身が函館で、長男ということもあり、函館で暮らし始めました。主人が元々料理が好きだったこともあり、郷土風味「魚来亭」をオープンしました。お店は海鮮料理が人気で、刺身、焼き物、煮物などを提供しています。

息子も料理人で、東北、関西を渡り歩き、宮内庁で天皇陛下の食事を作っていたこともありました。浪江町からは、親戚が季節ごとに食材を送ってくれていました。6月になれば梅が届き、その梅で梅酒を作ってお店で提供したり、11月になれば新米が届き、新年になればお餅や干し柿がたくさん届くのが本当にうれしいです。干し柿は本当に楽しみです、主人の大好物でしたか

ら、「もったいない、もったいない」と言いながら大切に食べていました。

浪江の思い出は、小さな頃から夏になると請戸の浜に行き、海水浴をしていたことですね。平成28年10月に同窓会、辰巳会の集まりで浪江町を訪れましたが、津波で請戸の浜が何もなくなくなってしまったのを見た時に、あの辺りに住んでいた人のことを想うと言葉が見つかりません。

これからの浪江町は、子供の声にぎやかに聞こえるくらい復興してほしいと願っています。私と同世代の方々は町に戻っていますが、子供世代、孫世代が暮らすには、まだまだ時間がかかるでしょうね。あと20年くらいして、3世代と一緒に落ち着いて暮らせるようになってほしいです。

広島県



## 伊丹 眞二さん(赤宇木出身・広島県在住)

取材者：ひろしま市民活動ネットワークHEART to HEART 竹内

取材日：1月23日 [平成31年4月 広報なみえ掲載]

### 広島から福島をいつも応援しています！



▲全国男子駅伝初優勝の記念写真と一緒にパチリ！

去る1月に広島で行われた天皇盃第24回全国男子駅伝（通称：ひろしま男子駅伝）にて、福島県は初優勝！今回はひろしま福島県人会の皆さんがいつも集う喫茶店「蔵王」にて、福島県チームの記念写真をバックにお話を伺いました。

#### ◆現在のひと

高校まで浪江町（赤宇木）で過ごし、大学進学のために上京しました。その後、大阪万博準備を始めとして土木の仕事に携わり、昭和45年9月に広島へ来て以来、岡山市（岡山県）や益田市（島根県）にも赴任しました。土木の仕事は64歳まで続け、その後は有料老人ホームで管理人の仕事をしています。結構大変ですが、75歳ぐらいまで

続けようと思っています。

年に一度は浪江に戻っています。中学・高校時代の同級生とは、帰省した時に飲み会をやっていますよ。高校時代は双葉町に下宿して双葉高校へ通い、毎日柔道の練習に明け暮れていましたが、お陰で県代表にもなりました。

震災当時、赤宇木の自宅にいた母（昨年99歳で逝去）、長男夫婦、長男の子供夫婦はみんな新潟へ避難し、現在は福島市に住んでいます。自宅は今も残っています。

#### ◆ひろしま福島県人会のこと

平成7年、広島で開催されたアジア競技大会の頃から始めて、来年は25周年の記念行事をやる予定です。私は4年前から6代目会長になりました。

会には正会員が85世帯、特別会員（震災関連）が15世帯おられます。若い方は40歳代、上は85歳の方もおられますが、みんな元気です。

毎年主催する行事は、4月に総会、7月にビアガーデン、

10月は芋煮会、2月は物産展があり、そのほかにも、7月から9月にかけては、支援者による福島支援のチャリティーイベントがめじろ押しです。昨年からは「福島県東日本大震災ふくしまこども寄附金」にイベントの収益金を送るようになり、福島県と一緒に、大震災により遺児・孤児となった18歳までの子供たちを支援しています。

#### ◆浪江のこれからのこと

帰還した方が少ないようですが、今はまだ生活のインフラが十分整備されているとはいえないので、土地の文化が醸成されるぐらいの活気が戻ってきてから帰還してもいいんじゃないでしょうか？まちづくりには60年ぐらいはかかると思っています。



福島県

## 島田 有紀さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 佐藤

取材日：2月9日 [令和元年5月 広報なみえ掲載]

### ソフトボールの仲間や町内の皆さんとお会いする時間を大切にしています

島田さんの取材は2回目で、第54号(平成27年12月号)で取材した時には郡山市に暮らしていましたが、勤務する「福島さくら農業協同組合」の転勤で浪江支店に配属されたのを機に、平成29年10月から浪江町のご自宅で暮らしています。また、浪江町ソフトボールチーム「SSB」に所属し、浪江町のソフトボール代表メンバーでもあります。島田さんのお話からは、人とのつながりを大切にしながら故郷で前を向き、仕事にソフトボールにと、実直に取り組んでいる様子が伝わってきました。



▲愛用のソフトボールのバットと一緒に撮影しました

◆震災当時から現在まで  
震災時は双葉町に勤務中でしたが、母と電話ですぐに連絡を取り、合流しました。父は役場職員だったので、業務で町民を避難先に誘導するため、家族から離れていました。最初は、車で高台まで避難し、浪江中学校の校庭で車中泊をし、藤橋の母の実家に2泊ほどした後、母と母方の祖父母と4人で、いわき市の好間公民館に避難しました。その後は、私は茨城県ひたちなか市に、母は東京に、祖父は埼玉県久喜市にと、それぞれ家族や親戚の家に避難し、バラバラでした。約1か月後に二本松市の借上アパートで父も合流し、ようやく家族で一緒に暮らすことができるようになりました。

私は2か月後に仕事を再開し、福島市、郡山市や広野町(いわき市在住時)勤務を経て、平成29年4月からの浪江支店再開に伴い支店配属となり、浪江町に戻りました。父が自宅をリフォームしてくれ、家具や内装を全て取り換えて、今は実家で暮らしているところです。父は役場を退職後、町商工会に5年間勤め、こちらも退職し、現在は「叔母のそばにいられるように」ということで、父と母のんびりと郡山市で暮らしています。

◆浪江町に暮らして感じること  
町内で飲食店は再開しているのですが、スーパーがなく、普段の買物は南相馬市原町区や富岡町まで行かなくてはならないので大変です。あまり、町民が戻って来ていない状況ですが、自分の出身地、そして自宅に住めるといふ安心感があることはよかったです。また、避難先では雪で苦労したので、浪江の穏やかな気候は、やはりうれしいです。

町では、建物の解体が進んでいる状況で、車で通ると「ここに何々があったよな」と、昔を思い出して懐かしく思うときがある一方、建物の再建や農業の再開なども進ん

でおり、町民の皆さんが帰りやすい環境を整備するため、みんなが頑張っています。ちよっと大きな夢かもしれませんが、年に一度だけでも、町民の皆さんに町の様子を確認に戻って来ていただき、懐かしんでいただけたらと思う気持ちもあります。

◆ソフトボールの仲間や町でお会いする方と過ごす時間を大切に

小・中・高等学校とずっと野球をやってきて、18歳の時にソフトボールを始めました。町のソフトボール大会に参加した時に「SSB」に誘ってもらい、入ったらとても雰囲気の良いチームで、メンバーとは大会以外でも、忘年会、新年会などで集まる時にも楽しく過ごさせてもらっています。みんなに会うと、浪江を感じるができます。

今、町内に勤務していると、やっぱり知人や馴染みの方などに会うことができるので、昔を懐かしく思い、「今どうしてんだ?」と話す時間がとても大切に感じられますね。あとは、ソフトボールの市町村大会が年1回開催され、こうした状況でも浪江のメンバーが集まり、合流して飲んだり話したりする時間は楽しい時間で、「自分の今の支えかな」と感じています。



茨城県

きさら942

## 八幡 喜美男さん・万里子さん(室原)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 菊池

浪江町復興支援員 中嶋・森

取材日：1月22日 「令和元年5月 広報なみえ掲載」

### 「きさら942」は、嫌なことを忘れて、 笑い笑顔があふれた集まりです



きさら942の代表である八幡さん夫婦は、当初の避難先であった沖縄から、故郷の浪江町に近い北茨城に家を購入し引っ越してきました。浪江町復興支援員の方が訪問した時に、八幡さんからの「家が広いので、浪江の皆さんが集える場として使ってください」という申し出を受け、浪江町復興支援員が中心となり、茨城県の県北地区に、浪江の皆さんが気兼ねなく集まり、定期的に親睦が図れるような場を作りたいという思いで、自治会の立ち上げに向けて、会員の募集や役員への就任依頼などに奔走してきました。何とか会員も集まり、この会の名称を、会の拠点となる会長の八幡さんの自宅の所在地から取って「きさら942」として、平成29年10月に設立し、活動を開始しました。

#### ◆会の活動について

##### 万里子さん

震災後は沖縄に避難して約5年間を過ごし、その後、福島に近い場所の家を探していたところ、この北茨城にいい物件があったので購入しました。

浪江町復興支援員の方が自宅に訪問してきた時に自治会の話しを聞き、「浪江町に恩返しをしたい」、「町民の皆さんに「くつろげる場」を提供し、くつろいでほしい」という思いから、主人が会長職を引き受け、自分が全面的にサポートしていくことにしました。

活動内容は、毎月定例会を第2水曜日に開いて、会員の皆さんが集まり、お茶を飲んだり、お菓子を食べたりしながら、浪江町での思い出、避難先での出来事、今の暮らしぶりなどを話しながら過ごしました。設立当初は、参加する人は多くありませんでしたが、会員の皆さんが友人や仲間を誘ってくれたりしたので、北茨城市だけでなく、いわき市などから参加してくれる人もいて、だんだん増えてきました。

活動を開始して半年ぐらいい過ぎたころには、参加者も徐々に増えてきて、毎回20人ぐらいの浪江町民が参加してくれるようになりましたが、ただ集まって飲み食いしながら話すだけで

は物足りなくなり、経済産業省の補助金を活用し、つるし雛・ちぎり絵・折り紙・絵手紙・竹細工などを、講師を呼んで指導してもらいながら作品を作ったり、ビールの空き缶を使って風車を作ったりし、出来上がった作品は「十日市祭」にも出品して、大変好評を得ました。

また、バーベキュー、忘年会、新年会なども企画し、参加してくれる会員も増えています。



▲つるし雛を作っている様子など





【前列】

藤橋 吉田 充雄  
藤橋 吉田 範子  
権現堂 佐藤 キミ  
高瀬 齊藤 たか子  
川添 高木 一子

【後列】

支援員 中嶋 淳栄  
支援員 森 美恵  
室原 八幡万里子  
田尻 八幡喜美男  
木幡 信子

## 会に対する思いや 浪江について思うこと

### ●八幡喜美男さん

とにかく、参加してくれる皆さんにくつろいでほしい。皆さんに喜んでもらえるのがうれしい。

### ●八幡万里子さん

浪江町で居酒屋を営んでいたが、震災により自分の生きがいで、目標だった仕事を奪われたことが一番ショックだった。でも、過去を振り返るだけでは前に進めないで、それは腹の奥にしまっておいて浪江に恩返ししたい。そして平穏無事な生活にたどり着きたい。それだけです。

## 会員の皆さんの声

●八幡さんに誘われたのがきっかけで参加するようになった。

●以前は、この北茨城に浪江町民の人たちが集まる場がなかったので、この会ができてありがたい。

●震災後には、周りの人からの心無い言葉で嫌な思いやつらい思いもしてきたが、このような町民同士の集まりでは、同じような経験をしてきた人

たちばかりなので、気兼ねなく話せるし、周りの目を気にしなくて済むのでうれしい。

●震災後は東京に3年間住んでいたが、知り合いの人もいないので、会話する機会が無く、言葉を忘れたような、言いたいような不安があったが、今はこの会に入って本当によかったと思っています。

●以前は、いわき市絆会の「ぐるりんこ」の皆さんが訪問に来てくれてありがたかったが、一部避難指示解除後は訪問も無くなり寂しかった。

でも今は、この「きさら942」に参加できるようになったので、ありがたい。

●以前は「勿来プロジェクト」というのがあり、そちらに行っていたが、援助が打ち切られたので、私たちは行き場がなくなりました。そんな時にこの「きさら942」ができてよかったです。

●日立市や東海村には、このような集まりがあるのを聞いていたが、少し遠いので参加できなかったが、この北茨城で参加できてよかったです。

### ●齊藤たか子さん

みんなが集まれる場所を作っていたら、八幡さんにもこのような場を提供してもらい、この会があるから笑顔で元気でいられることができるのでありがたいし、あとは前を向くしかない、前を向くしかないです。

### ●吉田範子さん

8年前の震災以降、子供ともバラバラになってしまった。今は浪江町にある家も取り壊されてなくなりました。

●この会に夫婦で参加させていただいているので、息抜きできるし、家に帰ってからも夫婦で会での出来事を話したりできる。浪江のことを考えてもしようがないし、諦めているので、ここで頑張るしかないという気持ちです。

### ●高木一子さん

人は浪江に帰れ帰れと言うけれど、震災前の浪江に戻してくれるのなら帰る、無理なのは分かっているけど…。

### ●木幡信子さん

言っても何も変わらない、考えてもどうにもならないので、ここで穏やかに暮らしたいと思っています。

●今まで嫌なこともあったが、この会に参加するようになって、人生がバラ色になったし、楽しい。いいこともたくさんあると思えるようになった。

●あと30年生きたい。

### ●佐藤キミさん

今は家も壊してしまったので浪江に対して心残りはないが、家があった場所に行くとな

が咲いていたり、川にいろカモを見たりすると、ついつい独り言を言っている自分がいる。

●人は少ないが風景はあまり変わらないので、電車を見るといわき駅から仙台に行ってみてみたいと思ったりする。

### ●吉田充雄さん

この会が活動し始めた当時は、こんなに長く続くとは思っていませんが、今はこの会をできる限り長く続けてほしいし、町民の皆さんが集まる

●「場」を提供していただいている八幡さん夫妻の気持ちが大変ありがたい。

### ●皆さん

●毎回、会長の八幡喜美男さんが手作りの汁物料理を振舞ってくれるが、これが本当に楽しみです、本当にありがたいです。





## 浪江町コスモス会

代表 渡部 一美さん(樋渡)・谷田 きよさん(権現堂)  
吉崎 ヨシ子さん(両竹)・岩崎 仁紫さん(樋渡)  
佐々木 勝さん(藤橋)・佐々木 理子さん(藤橋)

取材者：特定非営利活動法人くびき野NPOサポートセンター 新保

取材日：平成30年10月16日 「令和元年6月 広報なみえ掲載」

## 会を閉じても、どこに行っても、ずっと続く“つながり” 柏崎市の浪江町コスモス会の皆さんに聞く



▲浪江町コスモス会の皆さん（代表の渡部一美さん 前列左）

### ◆会の活動について

**渡部さん** 毎月一回、10人程度

の方々が柏崎市被災者サポートセンター「あまやどり」に集まり交流しています。時々旅行に行ったり、春にはお花見、秋には紅葉狩りなどにも出掛けたりしていましたよ。柏崎市に避難してきた方々が孤立しないようにと会を発足しましたが、会としては平成30年をもって一度閉じる予定です。会を閉じても、「あまやどり」で交流会なども開かれますし、個人個人のつながりが無くなるわけではありません。

### ◆皆さんの近況や会について思うこと

**谷田さん** 現在、病気を患って

しまい、病院と自宅の往復で一日一日を忙しくしています。会には発足時から参加していますが、浪江の方々と話ができるのがうれしいです。しかし最近、会のメンバーの一人が亡くなっています。とても悲しく思っています。

**吉崎さん** 柏崎市に引っ越して

きてから主人が亡くなり、今は娘と一緒に暮らしています。平成25年4月ごろから会に参加していて、月一回の集まりや旅行が本当に楽しみでした。

取材に伺った日は、福島県から宮城県に避難されている方々と新潟県柏崎市に避難されている方々の交流会が開催された日でした。主催は一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム。当日は、宮城県内から参加した方が13人、柏崎市に避難している方が12人、総勢25人が柏崎市被災者サポートセンター「あまやどり」に集まりました。

前半は、それぞれ現在の暮らしの様子や以前の仕事などを交えながら自己紹介。後半は、昼食を取りながら思い出話をしたり近況を語り合ったりしました。浪江町コスモス会のメンバーも、参加者との交流を楽しんでいました。



広島県



## 渡部 恵子さん(北幾世橋)・吉田 亀雄さん(樋渡)

取材者：NPO法人つなぎ te おおむた 彌永

取材日：3月14日 「令和元年7月 広報なみえ掲載」

### 故郷を離れても続くご縁、 新しい土地で生まれたご縁。どちらも宝物だよ

渡部さん夫妻と吉田さんは、震災前の浪江町に住んでいた頃から、仕事仲間という関係を超えた付き合いを続けておられます。今回は、渡部さんの自宅に吉田さんが足を運ぶタイミングで話を伺いました。

また、取材中に遊びに来られた、近所に住んでいる下川さんにも話の輪に入ってもらいました。



▲右から、渡部さん、下川さん、吉田さん

◆浪江町にいた頃から気心の知れた付き合い

**吉田さん** 私は、洋行さん（渡部さんの夫）の会社と一緒に働いていたんだよ。そのときからずっと気心の知れたお付き合いをさせてもらっているんだ。渡部さんの家は広くて、洋行さんも恵子さんもこんな感じで、気さくっていかさ。私だけじゃなくて、いろんな人が集まっていたよね。

**渡部さん** 家の離れには、車が20台とめられるの。だから会社関係の人や家族の方に「遠慮なくどうぞどうぞ」って声を掛けて、最高で40人集まったよ。料理の得意な亀ちゃん（吉田さん）に手伝ってもらって、皆さんに料理をふるまっていたのよ。それを大変なんて思ったことは一度もないよ。準備するこ

**吉田さん** 浪江では、高瀬川で釣ったイワナやアユも食べていたよね。浜通りには湾がないから、ホタテやカキは宮城県まで買いに行っていた。恵子さんは本当に料理が上手な人で、モクズガニで作る味噌やカボチャ饅頭なんかも、そりゃ旨いんだよ。あれは作る人で味も柔らかさも違う。一軒一軒に伝わる味だね。

**渡部さん** 私は作るのも好きだけど食べるのも好きだから、たたいも倒れないように見えるでしょう。でも実は体が弱くてね。入院もしていたんだけど、そのときに、ご飯から何から亀ちゃん

に世話してもらったの。  
**吉田さん** いやいや、そんなオーバーな。やれる範囲のことだけだし、当たり前だからさ。

◆震災後の町や人とのつながり

**渡部さん** 震災が起きたときは、「まず逃げろ」という状況だったから、みんなバラバラになった。私たちが最初は連絡が取れなくてね。ようやく落ち着いてきて、お互い行ったり来たりしているうちに、うちのお父さん（洋行さん）と私と亀ちゃんの三人で岐阜に住もうかって話で盛り上がったのよ。

**吉田さん** だけど、岐阜は雪が積もるからってことで、やっぱりやめてね。浪江は雪があまり降らないから。年に数回、多くても20センチメートルくらいかな。そうそう、冬になると「マリンパークなみえ」のパークゴルフ場に、北海道から観光バスでお客さんが来ていたよ。ロングホールは100メートル以上あるし、松林もあるし。いい所だったんだ。私の仕事仲間が郡山にいたんだけど、今でも年に一回は、日山（天王山）や須賀川に行つて、一緒にパークゴルフをやっているよ。



▲渡部さんお手製の刺繍作品

**渡部さん** 浪江の思い出は山ほどあるんだけど、うちは家を解体しちゃったから、浪江に帰っても泊まる自分の家がない。解体後に2回、草刈りをしたんだけど、大変だよ。

**吉田さん** 震災後5年目までは、町に帰って借りていたアパートの掃除や片づけをやっていたよ。家の中全部に思い出があつたからね。だけど、ネズミに何もかも破壊されたの…。

**渡部さん** 3月11日が近くなるよ、あまりテレビは見ないんだけど、たまたまつけていたら幾世橋に住んでいる方の懐かしい姿が映っていたのよ。すごくおいしい野菜をもらった思い出が

あつてね。テレビを通してだけど、顔を見られて嬉しかった。  
**吉田さん** 実は、つい先日まで岐阜で入院していたんだけど、そこに突然、渡部さんの家族が7人そろってお見舞いに来てくれたんだよ。洋行さんは車椅子に乗っていて、自分自身が体が不自由なのに私を励ましに来てくれたんだ。「サプライズ！」本当に驚いたし嬉しいし、言葉が出なかつたね。それで今回は、私が洋行さんの顔を見に行こうと思って。  
**渡部さん** お父さん（洋行さん）は足が悪くなつてから、寝ていることも増えてね。今日は隣の部屋で寝ているけど、きつとこの会話は聞こえていて、楽しんでると思うよ。

◆避難先での生活

**下川さん** 私は洋行さんとは、釣りの話題を通じての知り合いなんです。あの方は必ず自分から帽子を取り、挨拶をされる方でしたよ。

**渡部さん** そうなの。下川さんは「釣りのお師匠」さん。お父さんが釣りをできなくなつても、こうして遊びに来てくれるから、嬉しいし心強い。

**下川さん** 最初は遠慮がちに挨拶を交わす程度でしたけど、自然と会話をするようになってね。春が来て暖かくなつたら足腰も調子が良くなるかもしれない。そうしたら、また一緒に釣りを楽しみたいと思つているんです。まあ、釣りはできなくても、こうしてしょっちゅうお邪魔していますけどね。

**渡部さん** 浪江では畑に行くのにも鍵を閉めないし、地域の中では、誰もが顔を見れば「お茶、飲んでいけ〜」ってね。だから広島に来てからも、いつも玄関を開けて、誰でも寄つていけるようにしてんの。でも、ここではいつも人が来ているってわけではないから、1人のときは刺繍をして楽しんでるよ。

**下川さん** こういう人間関係づくり、地域づくりって大切だけれど、なかなかできないことでもあるんですよ。  
**渡部さん** 人のつながりってことでは、広島で水害が起きたときに、「なみえ焼そば」を作りに、わざわざ福島から広島へ来てくれたの。嬉しかったよ。それで私も、「自分が住んでいる広島の人たちに何かできないかな」って考えて、袋入りの「な

みえ焼そば」を注文したの。そして地元の方と相談して、自宅避難の方に配布したんだよ。福島の人間として、恩返し的气氛持たね。

◆震災を体験して思うこと

**下川さん** 福島で大変な思いをされた渡部さんから、私たちは学ぶことがたくさんあると思うんですよ。

**渡部さん** 故郷の家に住めなくなつて、気軽に帰ることもできなくなつた私たちの気持ちって、世の中の人は分かつているのかな。辛いのは私たちだけじゃなくて。二度とこんなことは起きちゃいけないし、ちゃんと訓練もしなきゃだめだよ。そのために、まずは隣近所、誰もが顔なじみになつて声を掛けあつてないかね。



## なみとも

代表 **小林奈保子**さん(権現堂)

副代表 **和泉 巨**さん(権現堂)

移住者 **大高 充**さん(川添)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：6月22日 「令和元年9月 広報なみえ掲載」

## 浪江の人たちや移り住む人たちと共に、浪江の明日をゆっくり作っていきたい

「なみとも」の活動拠点、「ゲストハウスあおた荘」で出迎えてくださったのは、一部避難指示解除後に浪江町に移り住んだ20代から30代の3人の若者でした。「なみとも」が相談に乗ったり、きっかけを作ったりした町外からの若い移住者は徐々に増えているそうです。

「私たちの暮らしの延長線上に『なみとも』の活動が当たり前のようにあります。この浪江でみんなが助け合って、楽しく生活できるように、隣組みたいなものになりたい」と、にこやかに話してくださいました。



小林さん



大高さん



和泉さん

◆東日本大震災が起きた時から浪江で暮らすまで、どのような経緯だったのでしょうか

**小林さん** その日は1年目から2年目という仕事の節目で、OJT（実務を通じて行う教育訓練）などの研修を受けていました。郡山市内の自宅マンションはX字型の亀裂がかなり入ってドアの開閉ができなくなり、知人のところに身を寄せました。

また、田村市の実家は菌床シイタケ栽培農家を営んでいて、シイタケを全て廃棄処分しなければならぬ家族を見ながら、自分にできることはないかと、やきもきしていたことを覚えています。放射線の危険に関する情報もあやふやで、周りのNPO活動をする知人たちとインターネットで情報交換をしていました。6月頃に会社が再開し、その後約2年間勤めましたが、時々、避難所になったビッグパレットふくしま（郡山市）などで手伝いをしていました。

コミュニティ再生活動に従事し、「よりあい処華」の開店サポートもしました。本当に手探りでしたね。

**大高さん** 受験のために埼玉の祖母の家に滞在していた時に震度5強の大きな揺れが起きました。慌ててつけたテレビからは津波の映像が流れ、まるでジオラマを見ているようで言葉が出ませんでした。家族や友人への電話はつながりませんでしたし、実家の近くで大規模な土砂崩れがあったことを知り、小・中学校の同級生だった和泉さんの家がとても心配でした。大地震当日に起きた、この白河市葉ノ木平地区の土砂崩れにより、住宅10軒がのみ込まれ、13人が亡くなっています。

その年の後期試験は取りやめになり、浪人生生活後、東京で5年間の大学生活を送りました。その間に、和泉くんやNPO法人Jinの川村代表から浪江の話聞いて関心を抱き、移住を考えるようになりました。

**和泉さん** 高校を卒業し、郡山市にある建築系の専門学校に入学が決まっていたのですが、震災で約1か月遅れました。白河の家は土砂崩れの現場に近く、近所の人も亡くなりましたが、僕はすぐに郡山市に引っ越ししました。それまで浜通りとのつながりは無く、津波や原発事故と言

平成25年9月、「田村市復興応援隊」の発足と同時にメンバーとなり、担当になった都路町の方々に暮らしへの要望などをヒアリングしたり、軽作業のお手伝いをしたりしながら、平成26年の避難指示解除後のコ



われてもピンとこなかったです  
ね。その後、社会人として関東  
圏で暮らしましたが、福島の状態は全く分かりませんでした。

会社を辞めて福島に戻ってからは、NPO活動をする知人から詳しい情報を聞き、私自身もNPOの活動に興味を持ちました。

平成28年にNPO法人みんぶくに入り、コミュニティ交流員として福島拠点で1年余り活動しました。浪江町との関わりが強くなり、町の自慢話を聞かされたり、日頃よくしてもらったりする中で、一部避難指示解除後の町の役に立つことがしたいと移住を決断しました。区長の佐藤秀三さんに相談したところ、この「青田下宿」のオーナーを紹介してもらい、「ゲストハウスあおた荘」の運営を始めました。

**小林さん** 浪江町で最初に行われた夏祭り、移住を希望していた和泉さんと知り合い、2人で平成30年2月に「ゲストハウスあおた荘」と「なみとも」を立ち上げました。コンセプトは「町の人と共にここで暮らそう」「友達の輪を広げよう」など、老若男女問わず人と人がつながる場づくりをしています。ゲストハウスあおた荘を活動拠点として、町の人たちや移住した若者同士が交流できるよ

うなコーディネートをしていきます。例えば、町民の方々と流しそうめんや餅つきをしたり、浪江の歴史や文化などを知る「なみえあるもの探し」を企画してまち歩きをしたり、移住相談にも乗ったりしています。今年は町外から20代の若者3人が移住してくれました。

◆今の暮らしや「なみとも」の活動、浪江町のこれからに対する思いなどを聞かせてください

**大高さん** 浪江町に越してからNPO法人Jinに就職し、トルコギキョウ栽培の研修を受けていますが、来年には友人と2人で独立します。何かを育てる・作ることに興味があったので、地域との関わり方がよく分かる農業は性に合っていると思います。

浪江町は気候的に過ごしやすく、海風も心地いい。人も優しいですし、何より都会よりもストレスが少ない。町には家や仕事を紹介する支援、移住者に対する家賃補助などを望みますし、双葉郡に寄り添った「移住定住支援制度」があったらいいですね。

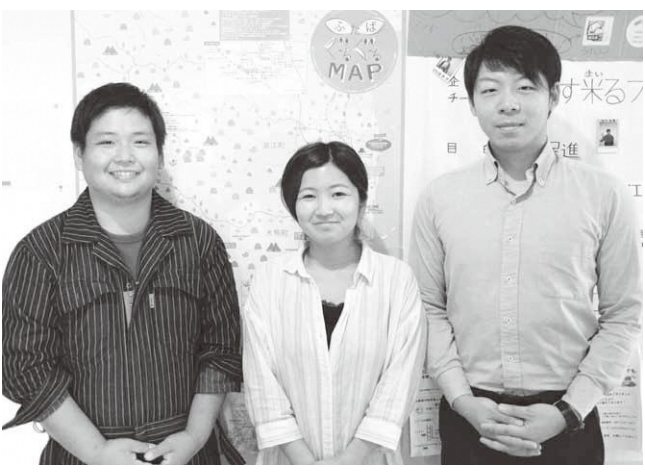
**和泉さん** 僕は今年、浪江の農家の方から指導を受けて、加倉や川添、西台の畑で、エゴマを作っています。浪江の土づくり

や風評被害に負けない作物は何かを考えながら農業を豊かにしていきたい。生活の糧も得たいし、移住者のモデルにもなりたいですね。

「なみとも」としては、運動会などで子供たちとの交流会など、総合学習で町内を歩き、大豆やエゴマ栽培などを見学・体験してもらったりしますが、今後さらに子供たちと一緒に地域づくりを学んでいきたいです。

僕は今、町民の方々ともつながり、不変なく楽しく生活しています。浪江でどう幸せに暮らしていくのか、10年後、20年後の姿を想像して活動していくことが大切ですし、外に向けて情報発信することも必要だと思っています。

**小林さん** 私は平成27年に浪江町職員の夫と結婚し、平成29年3月に一部避難指示解除になった後、同年4月に浪江町に越



してきました。主婦の傍ら、「なみとも」の活動やゲストハウスあおた荘の副管理人、エゴマ作りの手伝い。あとは、一般社団法人まちづくりなみえの視察ツアーのアテンドなども。それから若者同士で月1回くらい「ごはん会」をしたり、近所のお店に出掛けたりしています。

2年前に比べると夜も明るくなり、町なかの施設もずいぶん充実してきましたが、これから浪江で育つ子供たちが増えるでしょうから、親子で過ごしやすい遊び場や公園などが整備されることを願っています。

『なみとも・ゲストハウスあおた荘』

浪江町大字権現堂字御殿南18-8  
Tel 090(2320)3874  
Url <https://namienet.wixsite.com/namitomo>



大阪府

## 志賀 伸子さん(川添)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永

取材日：6月19日 「令和元年9月 広報なみえ掲載」

### 故郷の夢は遠くへ…



▲自身の著書を手

志賀さんは夫の資隆さんとお二人で、大阪にお住まいです。

2年前の夏、東京の出版社による絵本の原稿募集を知り、「動物も人間も命は大切だと伝えたい」との思いから、被災地で何があったのかを、動物の目線で執筆。温かいタッチの挿絵付きの絵本「長いおるすばん」(広報なみえ4月号14ページ掲載)として、今年2月に出版されました。

#### ◆愛犬ランとの思い出

愛犬ランとは、生後50日で出会いました。母犬から離されて3日目。無邪気にじゃれてくる他の子犬たちと違って、隅っこでブルブル震えていたの。それでこの子を選んで、懐に入れて連れて帰りました。私たちの話す言葉が分かっていたのね。「さあ、草取りやろう」と言うと、草取り鎌をくわえて持ってくるし、「新聞」と夫が言えば尻尾を振って持ってくるの。そんなランも、大阪に来て3年目に老衰で目も耳も衰え、その上、がんと診断されました。ある夜、異変を感じた夫がランの脈を取ってみて「もう駄目だ」と。「ラン!」と呼ぶと、かすかに尻尾を振って答えたの。だからもうかわいそうに

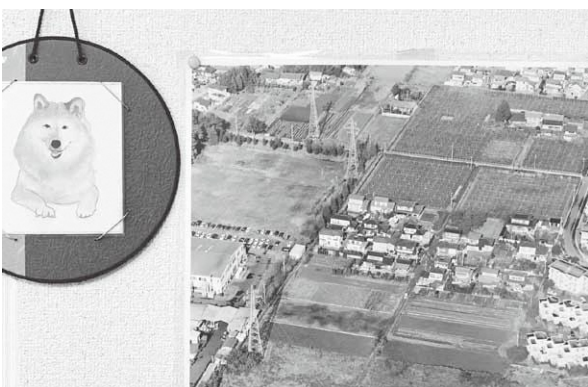
なって、耳元で「じいちゃんばあちゃんは大丈夫。今までありがとう。もう、眠っていいよ」と呼び掛けたら、それまで振っていた尻尾の動きを止めて…。これがランの17年の最期でした。

#### ◆震災から今日まで

地震直後は何が起きたのか理由も分からないままに、夫とランと一緒に町を出ました。避難はスムーズではありませんでした。まず家探しへ。犬が一緒にだと分かると断られました。転々とした後に娘がいる大阪に行くことを決め、航空券を取るための順番取りに4日間も空港内で泊まりました。ところが、ようやく大阪へ着いてタクシに乗ったら「え、福島から? 被ばくしているんですか?」と、乗車拒否されそうになりました。犬は荷物と一緒にトランクに入れられてね。また、口座開設しに行った銀行では、開設を拒否されました。しかも2行続けて。拒否の理由は不明のままです。「被ばく」という言葉の重みや差別性を、こちらに来てから感じるようになりました。私たちは避難者であると同時に、放射能被ばく者であり、危険人物だったのかも…。こんなことがあって、早くも8年が過

#### ◆出版への思い

この絵本では、動物が放置された理由を「原発事故」と、はっきり文字にはしていないんですが、読んでもらえればそれを感じて、そして分かってもらえると思います。原発事故では、人だけではなく動物にも多くの犠牲が出ました。絵本を通じて一人でも多くの方に知っていただきたいと思います。



▲震災前の自宅付近の航空写真と直筆の愛犬ランの肖像画



## 佐山 航平さん(川添)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 村田・赤間  
取材日：6月26日 「令和元年10月 広報なみえ掲載」

### 町の復興の話を聞くと自分の士気も上がる。 若い人が戻って来られる環境にしてほしい



▲将来の夢の実現に向けて意気込む佐山さん

宮城県石巻市にある日本製紙株式会社石巻工場で働きながら、硬式野球部に所属されている佐山さん。身長190センチメートルの長身を生かし、一塁手として活躍中です。

現在、一人暮らしをされている石巻市内でお話を伺いました。

#### ◆震災時は中学校2年生。家族ばらばらに避難

震災の日は通っていた中学校の卒業式で、地震が起きた時には友人の家にいました。学校で地震の体験をしたことがあったのですが、それと同じ大きな揺れでした。自宅に戻ったところ、停電はしていなかったのですが、すぐにテレビを見たくて、最初は何が起きたのか分かりませんでした。

当時、父は高齢者のグループホームを経営していました。入居者とともに津島地区に数日滞在し、その後、福島市へ移動しました。母は障がい者の施設に勤めており、利用者の方と一緒に西郷村に避難しました。私と当時双葉高等学校の1年生だった兄は、白河市の親戚の家に避難し2週間お世話になりました。兄がいわき市の高校に編入することになったので、父と3人



▲明治神宮野球場でホームラン

で白河市からいわき市の借家に移りました。母が西郷村に残っていた間は、父が自分たちの世話をしてくれました。

現在は、いわき市に自宅を建て、両親と兄が住んでいます。グループホームは本宮市で再建したので、父は毎日、いわき市から本宮市へ通っています。

#### ◆日本製紙株式会社石巻工場で働きながら野球に打ち込む毎日

野球は小学校1年生からしていました。少年野球チームで週に3日(月・水・金曜日)の練習がありました。今泉さん(第67号・平成29年1月号掲載)や今泉さんのお兄さんとも同じチームで、家族ぐるみの付き合いでした。

いわき市の湯本高等学校に進学し、野球部で活動していた時に、今の職場である日本製紙株式会社からスカウトされました。

た。高校を卒業した平成27年4月に入社し、石巻工場に配属、硬式野球部に入りました。普段は、午前は経理の仕事、午後は野球の練習という1日です。シーズン中は一日中練習ということもあります。

8月下旬からは、遠征試合が始まります。両親もよく試合を見に来てくれます。夢はプロ野球選手。やれるところまで一生懸命やりたいです。

#### ◆浪江の頃の友人との交流は続いています

石巻市には浪江の知り合いはいないです。石巻市に来た頃は、親元を離れるのは初めてだったので少しホームシックにかかったこともありましたが、今は大丈夫。生活にも不便はありません。

浪江の友人とは高校時代には会えませんでした。社会人になってからは結構会って昔の話をしています。二本松市であった成人式では、たくさんの同級生に会うことができました。また、試合の遠征先で、友人と会ったりもしています。

浪江の自宅は解体され、更地になっています。浪江に行くのはお墓参りくらいですかね。高校の先輩が町役場にいるので、町の様子は聞いています。復興の話を聞くと自分の士気も上がります。若い人が戻って来られる環境にしてほしいと思います。





# 鶴島 一浩さん・孝子さん(刈宿)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 高田

取材日：8月25日、9月21日 「令和元年11月 広報なみえ掲載」

## 「南町団地は1つ。団地から孤独死を出さない」を合言葉に。集会所のイベントは月に15回。いつでも大入り満員です。



▲8月25日に開催された夏祭りよさこい演舞の様子

平成28年12月に入居開始になった南相馬市原町区の復興公営住宅南町団地。5棟255戸の大きな団地で代表管理人として日々奮闘されている鶴島一浩さん。今年8月には、管理人会主催で初めての夏祭りを開催。よさこいチームの演舞やライブなど内容盛りだくさんの夏祭りは、参加者が400人を超え、大成功を収められました。住民の困りごとや団地の課題に毎日向き合っているご夫妻にお話を伺いました。



▲団地の課題に日々奮闘中の一浩さんと孝子さん

◆初めての夏祭りは大成功  
**一浩さん** 入居者が外に出て、話して、仲良くなると、孤独死をなくす。そのために入居直後から集会所を使った交流会を開催してきました。  
**孝子さん** 夏祭りは初めてだったので、最初は人が集まるか心配でした。準備が進むにつれ、参加申込みが100人を超え、よさこい出演団体も3チーム、4チームと増え、そのうち、参加申込みが200人、300人と増えていき、途中からはうれしい悲鳴でした。

隣の駐車場に変更。3日前から車の移動をお願いしたり、机や椅子も足りないのでも市内の他の復興住宅から借りてきたりともんで準備しました。  
結果的によさこいは7チームに。入居者と出演者、出身市町の社会福祉協議会や復興住宅の支援をされているNPO法人みんぶくの皆さんあわせて436人。天気にも恵まれ大にぎわいの1日になりました。  
**孝子さん** 普段の交流会では顔を見ない方も多く見掛けられ、交流が広がる機会になったと思います。  
◆代表管理人として団地の課題に向き合う日々  
**一浩さん** 団地の中で困りごとがあると、直接私に電話が来ます。支援団体からの連絡も私の携帯に来ます。こういった日常的な対応は多く、今年度はすでに575回です。

**孝子さん** 昨年度は家賃補助の仕組みが変わったため、手続きが分からない方の相談が多かったです。皆さんの喜ぶ顔を見るとうれし、頼られるのはいいのですが、次から次へと来られると疲れてしまうこともあります。  
団地の高齢者の皆さんは、私たちの両

親の世代。なんとか生活しやすいように、交流を多くして少しでも楽しみを多く、という思いは分かるんだけど。3人の子供たちはみんな宮城県内で暮らしているのですが、私たちが忙しいのを心配して、早く近くにおいでと言ってくれたりもします。  
◆小さすぎる集会所がネック。  
行政にも頑張ってもらいたい  
**一浩さん** 南町団地は255戸もある大きい団地なのに、集会所は32坪で二本松の表団地(44戸)と同じ。せめて、南相馬市内の他の団地と同じ60坪規模の集会所が無いと不便です。入居直後から集会所が狭いという声が住民から出ています。  
**孝子さん** 実際、集会所が満員になってしまいう行事も多くあります。そうすると、せつかく外に出て来てもらっても、諦めて帰ってしまう。とてももったいないです。

**一浩さん** 集会所を使ったイベントは、月15回くらい。毎回20〜30人は集まっています。こういった実績を持って、昨年、県庁に陳情に行きました。今年に入ってから、集会所増築の話が出てきています。ただ、まだ十分な案は出てきません。避難生活で苦しい思いをしている我々が頑張るって交流を生み出しています。ぜひ、行政にも頑張ってもらいたいと思います。

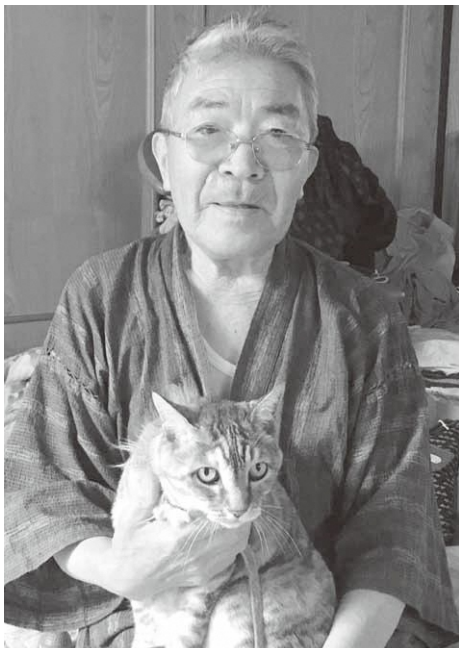


福島県

## 山田 四郎さん(立野)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田  
取材日：9月10日 「令和2年1月 広報なみえ掲載」

### 今、けっこう大丈夫ですよ。幸せですよ



▲長年連れ添う猫の桃子と一緒に

福島交通飯坂電車が近くを走る福島市郊外の自宅で、愛猫の桃子(15歳)と共に暮らす山田さんは、取材の前日が80歳のお誕生日でした。

運転免許証を2年前に返納され、浪江町などへの外出はやや不便になられたがゆえに、ふるさとへの思いはこれまでも増して募っているのではなからぬかと思いつつ、お話に耳を傾けました。

◆人との出会いに、本当に恵まれています

被災当時、南相馬市の雲雀ヶ原陸上競技場に1日だけ避難し、近くの小学校に移って2日、その後、相馬市の以前の相馬女子高校(現・相馬東高校)校舎にも避難をしました。

当時、大熊町で教員をしていた息子家族は会津若松市に避難しましたが、私は会津には行きたくなかったため、娘の嫁ぎ先の紹介で山形県村山市の借上げ住宅に入りました。一時は息子たちも一緒に避難生活を送りましたが、息子たちは今、会津若松市に住み、孫2人は大学生と高校生になっています。

私は、震災前から福島県農業共済組合の双葉郡代表を務めたり、地元選出の県議会議員や県知事の選挙応援などをしたりし

ながら、立野のふるさとづくりに関わってきました。避難中に福島市の知り合いの選挙事務所を訪ねた折、隣の不動産屋さんに貸家を紹介してもらったのが、今の家です。ですから、私は仮設住宅に住んだ経験がありません。

避難から1か月ぶりに浪江の自宅に迎えに行った2匹の犬たちは、1匹は動物愛護団体に引き取られ、今も福島市内で健在ですが、もう1匹は病死してしまい、私の手元には猫の桃子だけになりました。

私は早くに妻を亡くしており(享年49歳)、子供たちの面倒も見てきました。だから家のことは苦になりません。私が作る、だしを工夫したおでんは評判がいいですよ。とは言っても、足が少し不自由になり、立って歩くことが苦になりましたので、朝はごく簡単に、夕方は外食です。

福島市に住んでいても友人・知人が頻りに訪ねてくれたり、かつて仕事で全国各地を訪ねた時に知り合った人たちが特産品を送ってくれたりします。

中でも、避難中に知り合った市内の割烹料理屋の女将さんには、一方ならぬ世話になっていきます。食事をしに行くことももちろん、整骨院への同行や家政婦さんの紹介をしてもらいな

ど、本当に有り難いです。  
◆地域に対する思いは、人一倍強いはずですよ

ふるさとづくり、村づくりは本当に好きだったですね。浪江町立野宮農組合を仲間7人と共に作り、親世代からの農地の基盤整備、つまり大型区画化して田んぼの効率化を図ったり、米づくりのためにきれいな水と川を守るため、用水路にニシキゴイを放したりしました。この区画整理は新しい取組でしたが、地元の反対も結構ありました。それでも、宮城県から大型バスで視察に見えたり、伊達郡国見町から研修にいられたりして、だんだん認知されたいですね。その国見町と私たちの地区の取組が、何年後かに一緒に県知事から表彰を受けた時には、感慨深いものがありましたよ。

今年5月、元浪江町農業委員会会長として、福島県の農業功労賞を頂きました。これまで地域づくりに尽くしてきた証しだと思います。

ですが、あまりにも帰還を待つ時間が長過ぎました。これからは若い人たちにどんどん引き継いでいってほしい。またニシキゴイが泳ぐ美しい立野に戻ればいいですね。町長も議会も、若い世代が戻れるような環境づくりに努めてほしいと思っています。



新潟県から「復興なみえ町十日市祭」に参加された皆さん

柴 恵美さん(請戸)・有賀 春香さん(南相馬市)  
渡邊 浩二さん(双葉町)・堀川 浩之さん(大熊町)  
押見 敏昭さん(NPO法人地域活動サポートセンター柏崎)

取材者：特定非営利活動法人くびき野NPOサポートセンター 新保

取材日：12月19日 「令和2年3月 広報なみえ掲載」

## 子供たちにつなぎたい故郷の風景

新潟県内に住んでいる福島県外避難者の希望者らが、11月23日・24日に開催された「復興なみえ町十日市祭」に参加しました。今回、実際に参加された4人と同行した支援スタッフの皆さんに集まってもらい、「復興なみえ町十日市祭」に参加した感想や故郷への思いをお話しいただきました。



▲十日市祭に行った思い出を振り返る皆さんと押見さん(右)

▲左から渡邊さん、堀川さん、有賀さん、柴さん

◆新潟での暮らしや近況について教えてください

**柴さん** 以前にもこの通信に掲載してもらいましたが、月日が経つのはあっという間です。私は小学校から高校まで浪江で育ち、浪江で暮らしていくことを当たり前のように思っていたので離れたくはなかったです。子供たちの故郷も浪江になるだろうと思っていました。震災を機に柏崎市に来ることになってからも、何度か福島県へ戻ることも考えましたが、子供たちの気持や学校生活のタイミングなどを考えると難しかったです。

最近では、息子が柏崎市の成人式に出席し、娘はこちらの高校を無事に卒業しました。また、娘は浪江の友人とも会ったりしているようです。

**有賀さん** 私は南相馬市に住んでいました。高校時代は浪江に通っていましたし、旦那の実家も請戸だったので浪江は近く感じています。旦那の仕事の都合で柏崎市にきましたが、その後、母と祖母が南相馬市原町区の仮設住宅へ移り、旦那が福島県へ戻ったため、家族ばらばらの生活になってしまいました。柏崎市に来て初めて出会ったのが高校の同級生だった柴さんで

した。縁があり今もこうして一緒に活動しています。

**堀川さん** 以前、母と叔母と3人で大熊町に住んでいました。震災発生後、避難所の体育館に入れず文化会館で過ごした後、新潟県にいた妹に迎えにきてもらい、借上げ住宅や中古住宅などで暮らすようになりました。

それから故郷の行政区の会合などにはできるだけ参加するようになっています。浪江には親戚がいたこともあり、幼い頃、バスに乗って遊びに行っていたのを思い出します。大人になってからもサンプラザへ買物に行ったり、十日市祭にも時々行ったりしていました。

**渡邊さん** 私は双葉町在住でしたが、職場が浪江のスイミングスクールだったため、もしかしたら知っている方も多いかもしれませんが、震災発生時もプールの中で被災、その後旧常葉町の施設で避難生活を過ごしました。当時、中学校2年生、3歳、乳幼児の3人の子供がいたので、少しでも安全で安心した生活ができるよう、妻の父を通じて柏崎市に避難してきました。子供たちも大きくなり、今ではここでの生活にすっかりなじんでいるようです。



▲十日市祭を楽しんでいる一こま

◆「十日市祭」そして故郷に  
行ってみたい

**柴さん** 十日市祭といえば、年に一度のお楽しみであり、ソフトボール大会が開催される日でした。今回、震災後会えずにいた友人に偶然会うことができ、とてもうれしかったです。

**渡邊さん** 私はダルマ市の方が懐かしく感じますが、十日市祭も地元の子供たちが楽しみにしていたのを知っていたし参加できてよかった。大熊町から国道288号を抜けるとところに紅葉

スポットがあるんだけど、当日は雨で見るができなくて残念でした。

**有賀さん** 震災後初めて十日市祭に行けてよかったです。ただ、地元の風景はどんどん変わっていくと感じました。

**柴さん** 震災後に何回か請戸にも行ったが、今回改めて行ってみて感じたのは、懐かしさというより違う空間にいるような感覚でした。

**渡邊さん** 実は私も似たような感覚。今回もそうだし、双葉町に行くときも、なんか故郷に帰ってきたというより、その地名の場所に行ったというような不思議な感覚ですね。

**堀川さん** 私も大熊町に自宅が残っているので一時帰宅で帰るときがあるけれど、そこにはゲートがあつて気軽に「ただいま」と言って帰ることができない。家自体もイノシシなどに荒らされてしまっているので、なかなか故郷に帰ってきたという感じがしませんね。

**柴さん** こちらでの暮らしが長くなり、故郷へ戻っても変化の過程を見えないから帰るたびに不思議な感覚になりますね。

◆故郷への思いや気持ちを聞かせてください

**柴さん** 浪江が新たに生まれ変わってほしいというような期待より、人がいて、お店があって、学校に子供たちの声が響いて、という日常が戻ればいいなと思っています。やっぱり子供の声や笑顔って地域の活力になりますよね。

**渡邊さん** 新たな復興拠点ができたり、駅周辺に新しい宿泊施設などが設置されたりしている様子を見ると、どういった意味があるのかと考えてしまっています。元どおりになることを願っているのに、新たな建物などが設置されることで故郷の風景が変わっていつてしまう。

**有賀さん** 確かに、今まで住んでいた風景を思い出せなくなってきたりもする。

**柴さん** 8年という月日が経ち、復興に対して住民、広域避難者、行政などによってそれぞれ距離感や感覚が変わってきていると思います。私はやっぱり安定を求めてしまうので、「やっつと」と感じる今ここので暮らしを壊したくない気持ちが大きいんです。

**渡邊さん** こちらでの暮らしが長くなると、故郷のことを考え

る時間も少なくなっています。復興やまちづくりに関わる方々は、一生懸命多くのことを考えていらっしやるのも理解しているつもりです。故郷の町が新たな建物などでどう変わっていくかより、子供たちに何を見せられるか、何を残せるかだと思う。子供たちが育ったときに、「自分の故郷はこんな素敵なおとこだったよ」と伝えることができる町になるといいなと思います。

◆今回、柏崎から一緒に同行してみたい

**押見さん** 参加者の皆さんが、十日市祭で地元の知人の方々とお会いして喜んでる様子を知ることができて良かったです。ここ柏崎市にも「えんま市」という同じようなイベントがあります。新潟県中越沖地震も経験しましたが、一つのお祭りが人と人や地域をつなぐ大切な縁になるのだなと実感しました。今回、実際に現地で見たり聞いたりはしたことは言葉にならない体験でした。改めて、まずは自分ができること、そしてこれからも心に寄り添った支援を続けていきたいという気持ちを持つことができました。



## 近藤 賢さん(大堀)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田  
取材日：12月16日 「令和2年2月 広報なみえ掲載」

### 大堀相馬焼の心は受け継ぎながら、この新しい場所で、新たな焼き物の潮流をつくりたい



▲作品の前で、にこやかに撮影に応じてくださいました

作品の前で、にこやかに撮影に応じてくださいました。地元の設計士さんをお願いし、父も僕も全部イチから

いわき市市街地から車で約15分。草野と四倉の間の海に程近い松林の中に、近藤さん親子の「陶吉郎窯」を擁する、ご自宅兼ギャラリーがあります。迎えてくださった賢さんに案内していただいたギャラリーは、お父様である学さんと、賢さんの作品が多数展示されており、その迫力に圧倒されました。

◆大堀に戻って半年後に、あの  
大災害に遭いました  
僕は、東日本大震災の前の年、平成22年9月に、それまで修行していた栃木県益子町から大堀に戻ってきました。妻や子供はまだ栃木県にいて、平成23年3月に大堀に越してくる予定になっていました。  
震災直後は、両親や弟と共に福島市の叔母の所に避難しました。栃木県にいた家族とは連絡が取れましたが、ガソリンがなくて、すぐに駆けつけることはできませんでした。  
平成23年5月には、父がいわき市植田に家を借り、工房と作品を販売する店も開きました。しかし、大堀に帰れるめどは一向につきかず、自分たちの棲家となる所をいろいろ探しました。  
そして、ようやく見付かったのが、ゆったりとした敷地に囲まれたこの建物です。ここなら「登り窯」を作っても火の心配はないし、工房や住居などの増築も思い通りにできそうでした。

したところ、本当に親身になって様々な注文に添えてくださいました。お陰さまで、訪れてくださる方々にも好評ですし、地元の人たちも喜んでくださっています。  
◆大堀相馬焼を継承しながら、作陶の新たな姿を創造したい  
大堀相馬焼の窯元は震災前には20数軒あり、その頃は父の世代がメインで、僕は同年代の作り手としては一番若いくらいなんです。震災後、窯元の数は約半分になってしまいましたが、避難先など各地で頑張っている人たちがいます。  
大堀相馬焼協同組合では、福島空港での展示会や浪江町内で開催する「大せとまつり」、そして、これから浪江にできる「道の駅」では展示販売や作陶だけでなく、一般の方向けのワークショップなども開催すると聞いていますが、大堀相馬焼の置かれた状況は厳しいと思っています。

◆子供たちにも、いつか大堀を見せたいですね  
僕は18歳まで大堀で育ちましたが、その記憶がどんどん薄らいでいるような気がします。行きたいときに自分の意思で訪れることができないふるさととは悲しいです。周りの人たちとのつながりも失われてしまうと感じます。  
近い将来、大堀に避難指示解除が出たとしても、今の拠点も大事にしたいですね。震災の時に幼かった子は16歳になり、震災後に生まれた子は5歳です。ふるさとが元の姿に戻り、子供たちを連れて行けるようになることを願っています。

◆「日本で一番新しい“登り窯”かもしれませんよ」と、近藤さん



▲「日本で一番新しい“登り窯”かもしれませんよ」と、近藤さん